



ショートコメント

★★★★★

Data 2023-131

監督：ベルナルド・ベルトル
ッチ

出演：ドミニク・サンダノジ
ヤン＝ルイ・トランテ
イニャン／ピエー
ル・クレマンティ／ス
テファニア・サンドレ
ツリ／ガストーネ・モ
スキ

暗殺の森

1970年／イタリア・フランス・西ドイツ映画

配給：コピアポア・フィルム／110分

2023（令和5）年11月3日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

👁️👁️ みどころ

『ラストエンペラー』（87年）で有名なベルナルド・ベルトルッチ監督は、イタリアの巨匠。『暗殺の森』と題された本作は、そんな彼の若き日の「性と政治の危険な関係に切り込んだ問題作」だと聞けば、こりゃ必見！

1930年代の日本は、天皇制の下で軍国主義化を進めたが、イタリアはムッソリーニ率いるファシスト党が、ヒトラー率いるナチス・ドイツと手を結び、世界制覇の夢を描いていた。そんな状況下、本作の主人公はなぜファシストに？なぜ恩師の暗殺という任務まで引き受け、その実行を？他方、いくらターゲットの若い妻が魅力的でも、そこに男女の情を持ち込むのはご法度のはず。しかるに、この主人公の行動は一体ナニ？

イタリアの巨匠の若き日の作品は多くの問題意識でいっぱいだが、その表現や演出は、今時の“何でも説明調”の邦画と違って、クソ難しい。ハイライトとなる暗殺のシークエンスが特異なら、結末の描き方もかなり特異。もし、私が主人公と同じ時代に生まれていたら、私もファシストに？そんな自己点検をしながら、本作の問題提起をじっくり受け止めたい。

◆イタリアのベルナルド・ベルトルッチ監督といえば、第60回アカデミー賞で作品賞、監督賞、撮影賞、脚色賞、編集賞、録音賞、衣裳デザイン賞、美術賞、作曲賞を受賞した『ラストエンペラー』（87年）が有名。1970年に作られた本作は、1972年に日本ではじめて公開されたが、当時、司法修習生になったばかりの私は当然それを知らなかった。

しかして、本作がたまたま「午前10時の映画祭」で上映されることを知った私は、本作が若き日のベルトルッチ監督による「性と政治の危険な関係に切り込んだ問題作」と知り、こりゃ必見！映画館へ。

◆1930年代の日本は、1931年9月18日の柳条湖事件（満州事変）や、1937年8月13日から始まった（第2次）上海事変によって、中国大陆への進出（侵攻？）を強めていた

が、イタリアではナチス・ドイツのヒトラーと手を結んだムッソリーニによるファシズムが強化されていた。本作の主人公は、第二次世界大戦前夜の 1938 年という時代に、哲学講師をしている男マルチェロ（ジャン＝ルイ・トランティニャン）。友人の盲目の男イタロの仲介によって、彼がファシスト組織の一員になるところから本作のストーリーは始まっていくが・・・。

◆近時の“何でも説明調”の、そして TV ドラマの延長のような邦画と違い、本作は何の説明もしてくれないから、ストーリーはもとより、人物像もわかりにくい。ウィキペディアによると本作は次のように紹介されている。すなわち、

13 才の頃に同性愛者の青年リーノに襲われたマルチェロは、リーノを射殺してしまった。それがトラウマとなっているマルチェロは、世間の波に乗ってファシズムを受け入れ、一般的なブルジョワ家庭の平凡な娘と結婚することで、特殊ではない自分を取り戻そうとしているのだ。組織の一員となったマルチェロは、大学時代の恩師であり反ファシズム運動の支柱でもあるルカ・クアドリ教授の身辺調査を任される。彼は新妻ジュリアを伴い、新婚旅行と称してパリへと旅立った。

しかし、あなたはスクリーン上（だけ）でこれをどこまで理解できる・・・？

◆本作の主人公マルチェロは哲学講師だが、まだ若いだけに、恩師のクアドリ（エンツォ・タラシオ）と比べると、その人間としての器の大きさの差は明らかだ。思想的にファシズムか反ファシズムかが両者を二分する最大の要素になるのは仕方ないが、年長者で器の大きいクアドリは、その差を顕著化させないように気遣っていることがよくわかる。また、マルチェロがクアドリの若い妻アンナ（ドミニク・サンダ）の魅力にぞっこんになったのも仕方ないが、それを行動に移していくのは如何なもの・・・。

◆マルチェロに与えられた任務が、当初の“調査”から“暗殺”に変わり、しかも、その監視役としてマンガニエーロ（ガストーネ・モスキニ）が付けられたため、マルチェロの精神的負担は相当なものに。それを新妻に相談できればいいのだが、ジュリア（ステファニア・サンドレリ）は一貫して“ノー天気”だから相談はムリ。他方、マルチェロとアンナとの仲は少しずつ進展していた（？）から、状況は次第にヤバいことに・・・。

◆そんな中、ある日遂にクアドリの暗殺決行日となったが、その姿はあなた自身の目でしっかりと。2022 年 7 月 8 日に起きた安倍晋三前総理の銃殺事件には驚かされたが、第一次世界大戦の引き金となった、1914 年 6 月 28 日のオーストリア＝ハンガリー帝国皇太子夫妻の暗殺事件や、1909 年 10 月 26 日にハルビンで起きた、朝鮮人・安重根による伊藤博文の暗殺事件等を見ても、暗殺は一瞬の出来事として起きるのが普通。ところが、本作では・・・？しかも、本作ではクアドリの車の助手席に乗っていたアンナが、マルチェロが乗っている車のドアまで来て「命乞い」をしているにもかかわらず、それを敢えて無視するマルチェロの姿は・・・？この男は、一体ナニ？私はそう思ってしまったが、さてあなたは・・・？

2023（令和 5）年 11 月 13 日記